発達理論の学び舎

Back Number: Vol 163

Website:「発達理論の学び舎」

© YOHEI KATO 2018

目次

3241. 外国語を学ぶ意義

3242. 推薦状及び精神疾患と加齢について

3243. 変化の美しさ

3244. 今後のオンラインゼミナールについて

3245. 秋のダンスに身を委ねて

3246. エリオット・アイスナー＆マキシン・グリーン＆ジョン・デューイ

3247. 人間心理を取り巻く短絡的なナラティブについて

3248. 不可避な哲学

3249. 夢と昨日の意識状態

3250. 研究手法の政治化

3251. 芸術の美と自然の美及び午前中の読書より

3252. 名も知らぬ誰かの仕事

3253. 夢の中の人物との思わぬ遭遇

3254. 意識が変容する夢

3255. ギリシャ正教の教会に関する夢

3256. 非民主主義的なアセスメント

3257. テレマンとバッハの曲：芸術教育を取り巻く価値観の変遷過程

3258. 診断型アセスメントと成長志向型アセスメント

3259. 夜空の月を眺めながら

3260. 海の上を飛ぶ夢

© YOHEI KATO 2018

3241. 外国語を学ぶ意義

先ほど昼食を摂り終え、昼食後は午前中に取り掛かっていた教育哲学書の続きを少し読んでいた。目の前の通りを一台の救急車が通り過ぎていった。

秋の冷たい風が街路樹を揺らしている。欧米での生活も七年目を迎え、その生活が長くなればなるほど、自分の内側にある英語空間の存在が強さを増している。まだわずか七年しか欧米で生活をしていないことを考えると、これから自分の内側の英語空間はより発達を遂げていくだろうと思われる。このあいだの日記に書き留めていたように、日本語として読んでいる文章は自分の日記だけになりつつある。おそらく今年のどこかでまた、日本語を無性に読みたくなる時期が訪れるであろうから、その時に本棚の和書に手を伸ばせばいい。それまでは、思う存分に英語空間の中で探究を続けていく。

英語空間の中での生活が長くなるにつれて、英語に限らず外国語を学ぶ意義を強く実感する。外国語はよくコミュニケーションのための手段にすぎないと言われるが、それは外国語の持つ根本的な自己変容作用を見落としていると思われる。外国語を深く学べば学ぶだけ、母国語の空間で構築されているありとあらゆるものを客体化することが可能になってくる。それは文化や制度のみならず、自分自身も含まれる。

基本的に私たちの自我の大部分は、母国語で形成されている。仮に帰国子女ではなく、生粋の日本人であれば、自我のほぼ全ては母国語で構築されていると言っても過言ではないだろう。

発達プロセスのある段階に到達すると、必ず乗り越えていかなければならないことがある。一つには、自国の文化的な慣習であり、もう一つは母国語で構築してきた自我そのものである。

人間発達の観点を用いると、外国語を学習する最大の意義は、まさに自国の文化的な慣習と日本語で構築された自我そのものを客体化することにあると思われる。残念ながらこれは、外国語を学習しなければ実現されることはほどんとない。仮に哲学者のように日本語を通じて絶えず自己を取り巻く文化と自己そのものを客体化させることをしない限り、外国語を学ばなければそれらの客体化をすることは極めて困難だと思われる。人間発達について探究を深めていくと、外国語の学習を、「コミュニケーションのための手段」という言葉で済ますことなど間違ってもできない。

© YOHEI KATO 2018

言語は私たちの精神生活の奥深くにまで浸透しており、奇妙なほどに巨大な根を無数に張り巡らせていることを考えれば、言語をコミュニケーションのための道具に貶めることなどできはしないだろう。

ここ最近、人間発達に関する文献を紹介することが何度かあった。日本人がどれだけ英語を苦手としているかは十分に承知だが、とりわけ人間発達に関して日本語の文献を期待することはできないと言わざるをえない。

現在、成人発達理論に関する日本語の書籍が何冊か世の中に存在しているが、それは人間発達に関する英語の文献の量とは比べ物にならないほど少ない。人間発達に関して関心があるのに、英語の文献を自ら読もうとしない人が多くいることは理解に苦しむが、自分の経験上、一年間ほど集中して英語の文献を読み続けていけば、それなりに英語が読めるようになってくると思う。

もし自分の関心分野の文献が英語以外の言語であっても、一年間ほどその言語空間に浸って文献を読み続けていけば必ずある程度読めるようになってくると思う。このようにして獲得された読解力というのは一生モノだと思うのだが、そうした一年間すらも費やそうとしない人がいるのはどうしてだろうか。ここにも現代人の学ぶ力の衰えと、自ら率先して学びを深めようとする態度の欠落を見て取る。フローニンゲン:2018/10/9(火)13:37

3242. 推薦状及び精神疾患と加齢について

時刻は午後の八時を迎えた。先ほど、一昨年に論文アドバイザーを務めてくださっていたサスキア・クネン教授から、推薦状執筆の快諾をいただけた。クネン教授には、過去に二度ほど推薦状を書いていただいているので、今回が三回目になる。有り難い限りである。

クネン教授にメールをした際に、一年半前によく話題になっていたクネン教授のお孫さんの現在の様子を尋ねてみた。当時はまだ“Oma(おばあちゃん)”という言葉を発することができないことを笑いながら紹介してくださっていたが、今ではすっかり大きくなり、随分と言葉を話せるようになったようだ。そのエピソードを聞いて、子供の発達の速度に改めて驚かされた。ちょうど先ほど、過去に何人かの方に執筆していただいた推薦状を読み返してみると、随分と私のことを見ていてくださったのだなと思った。

一昨年所属していたプログラムでお世話になっていたルート・ハータイ教授が執筆してくださった推薦状を読み返すと、本当に自分のことをよく見てくださっていたのだということが伝わってきた。今回もハータイ教授に推薦状を執筆してもらえればと思う。

今日一日を改めて振り返ってみると、今日もいろいろと日記を執筆していたように思う。毎日自分が考えていることや感じていることの八割のことを日記に書き、二割のことは自分の内側で温めている状態、もしくはその割合は見方によれば完全に逆かもしれない。いずれにせよ、日記を書き進めることと歩調を合わせて日々の探究活動と創造活動に営むことができている。

午後に作曲実践をしていると、ふと自分の内側にいる勤勉なミツバチが活発に仕事に従事している姿をイメージすることができた。こうした存在はおそらく誰しもの内側に眠っていると思うのだが、それが本来の役割を果たすためにはいろいろと手助けが必要なのだと思う。あるいは、それを目覚めさせるきっかけのようなものが必要なのだ。特にこのような現代社会においては多くの人にとって、自分の内側に存在する、ライフワークを推進していく力を司るものは眠ったままになっているのではないかと思う。

今日はこれから本日三曲目の作曲実践を行う。その後、過去の日記を編集してから就寝に向かいたい。

昨夜メールを確認した時に、所属している成人発達に関するメーリングリストに無視できない研究結果が報告されていた。それは、抑うつ的症状やトラウマがDNAを変容させてしまい、老化を加速させるという研究結果であった。なにやら、症状の重い抑うつ症状を患っている場合、実年齢よりも10−15歳ほど生物学的に年を取ってしまうらしい。ここに心と身体の密接なつながりを見る。

ただでさえ高齢化が進んでいる日本において、職場での過度なストレスの存在や心のケアの欠如などは、集合規模での高齢化を加速させてしまうことにもつながりかねないと考えていた。心の有り様と精神状態は細胞レベルで私たちの身体を変えてしまうということをもう一度念頭に置いておきたいと思う。

今回の調査結果は、心の病理的側面に関するものだったが、心の健全な発達は身体に違った影響を与えるであろうことが推測される。この点に関する調査は、瞑想の効果に関する研究を始めとし

て、少しずつであるが科学的な知見が蓄積されつつある。これからはそうした調査にも関心の幅を広げておこうと思う。フローニンゲン：2018/10/9（火）20:25

3243. 変化の美しさ

昨日から少しばかり起床時間が早くなったが、結局今日も起床したのは七時過ぎだった。やはりまだボストン旅行から戻ってきた心身の調整が完全に終わったわけではないことを知る。こういう時は、心身の調整の流れに逆らうことなく日々を過ごしていくことが肝要だろう。昨日の夕方、フローニンゲンの空を照らす夕焼けがとても美しかったのを覚えている。

ふと仕事の手を止めて窓の外を眺めると、印象派の絵画作品のような自然美がそこに顕現していた。フローニンゲンの夕日が美しいのは、その輝きが時間の経過と共に刻一刻と変化することである。つまり、夕日そのものの美しさに加え、変化が内在的にもつ美がそこに存在しているということだ。昨日の夕日は、変化そのものに潜む美を教えてくれたように思う。

もしかするとこれは、昨日サスキア・クネン教授から受けとったメールの中のエピソードにも感じていたことかもしれない。昨日の日記で書き留めていたように、クネン教授のお孫さんは言葉を随分と話せるようになったそうだ。“Oma（おばあちゃん）”という言葉を孫が初めて口にした時のクネン教授の喜びを察することができる。ここにも、子供の発達そのものが持つ美しさのようなものが見て取れる。

お孫さんの話をクネン教授のオフィスでしてから早いもので一年半以上の月日が流れた。その期間において、自分はどのような変化を辿ってきたのだろうか。自分自身の変化が持つ美を見出すのはなかなか難しい。それを見出せた時、自分の内側に存在する光を見出したと言えるのかもしれない。

内在する自己の輝きと、それが変化する輝き。それらの双方を見出す道をゆっくりと歩いていることを期待する。

今朝方起床してみると、七時半を迎える前ぐらいから目の前の通りの工事が始まった。夏から始まっていたこの工事も佳境に差し掛かっている。その証拠に、今日からは道にアスファルトを流し込む最後の仕上げに入っていることがわかる。二台のブルドーザーが、通りにゆっくりとアスファルトを流

し、道を固めていく。何かをゆっくりと流し込み、それをゆっくりと固めていくこと。それは私たちの人生の歩み方に相通じるものがあるように思える。

内側に何かを急激に流し込むのではなく、緩やかにそれを流し込み、ゆっくりとそれを固めていくこと。道端の工事の進行過程は、発達の過程そのものではないかと思う。

それにしても、作業員の方たちの朝は早いことに改めて驚く。今日は私が起床してすぐに工事が始まったので、なおさら彼らの仕事へ取り組む時間の早さには驚かされる。

今日はこれから過去に作った曲を編集し、その後バッハに範を求めて一曲作る。おそらくそのタイミングで、現在進めている協働プロジェクトのオンラインミーティングの時間を迎えるのではないかと思う。今日も自分の取り組みに着実に従事していきたい。フローニンゲン:2018/10/10(水)08:05

3244. 今後のオンラインゼミナールについて

昨日改めて、哲学を探究することの意義について考えていた。過去を振り返ると、私は実務家として最初のキャリアを開始させ、ここ数年は研究者としての立場をとりながらも、依然として実務家として日本企業と協働をしている。ここからも、実務的な側面をないがしろにできない自分がいることがわかる。そうした中において、ここ最近は人間発達や教育を哲学的に捉えていこうとする探究が始まった。

こうした哲学探究は、決して抽象的な言葉遊びになってはならず、企業社会や学校現場の中で実際に起きている問題の解決に向けてなされるものにしていく必要がある。それゆえに、自分の哲学探究は、多分に実践哲学の様相を帯びるものになっていくだろう。あるいは、臨床哲学的な実践だと言ってもいいかもしれない。

欧州での生活を通じて、自分が行う探究は全て、この世界の具体的な問題の解決に結びついていく必要があるという思いが芽生えた。現実世界に存在する問題を関係当事者と共に解決に向けて協働し続けること。それが自分の人生に与えられた役割の一つなのだと思う。それに付随して、自らの探究過程で得られた知見をいかに共有していくかも今後は考えるべきことかもしれないと思う。

今から一年前に、『成人発達理論による能力の成長』の出版を記念してオンラインゼミナールを開講して以来、ここまで一度もそうしたゼミナールを開講していない。

今の私には体系立てて人に何かを教えられるようなものはないという自覚があったのだが、近い将来にまたオンラインゼミナールを始めたいと思う。ただしその際には、これまで遠慮をしていたような内容にしないようにする。

現在、徐々に日本の中で成人発達理論の知見が広まりつつあるが、それはごくわずかな知見でしかなく、そうしたごくわずかな知見に依存する形で議論や実践が行われている状況に危機感を覚える。そうしたことを踏まえると、日本では一切取り上げられていないような重要な発達論者の仕事や発達科学の研究事項を深く学んでいくようなプログラムが必要なのではないかと思い始めている。そうなってくると、当然ながら日本語の文献に頼ることはできないため、プログラムで取り上げる文献は全て英語になるだろう。今すぐに開始できるようなプログラムではないが、時折ぼんやりとプログラムの内容について考えている自分がいる。どのような論文を取り上げ、どの書籍のどの章を取り上げていくのか。

昨日の日記で書き留めていたように、外国語を学ぶことは、母国語で構築されている文化および自己を客体化することにもつながるため、これからのオンラインゼミナールでは少なくとも読む文献ぐらいは英語にしてもいいのではないかと思う。そのようなことを考えながら、今日の仕事に取り組むことにする。フローニンゲン：2018/10/10（水）08:21

No.1342: Footsteps for Tomorrow

The outside world is covered by darkness. I can hear footsteps for tomorrow. Today was full of joy and bliss, and the sense of fulfillment will lead to that of tomorrow. Groningen, 20:53, Tuesday, 10/23/2018

3245. 秋のダンスに身を委ねて

つい先ほど、協働プロジェクトに関するオンラインミーティングを終えた。今から昼食を摂り、少しばかり読書をしたら、近所のスーパーに散歩がてら買い物に出かけようと思う。

ボストン旅行から戻ってきてからは、普段の生活リズムに戻り、最低限の外出しかしなくなった。そのため、一日のほとんどの時間を書斎の中で過ごしている。

書斎の窓から外を眺めると、落ち着きがありながらも、踊りたくなるような陽気な世界が目の前に広がっていることに気づく。火曜日の正午を迎えたが、休日のような雰囲気がフローニンゲンの街を包んでおり、街全体と取り巻く自然が作り出す秋のダンスに身を委ねながら、今日も思う存分に探究活動と創造活動に従事したいと思う。

昨日ふと、確かに私は世界の様々な場所に住んできたが、結局どこにどれだけ住もうとも、この世界を理解することには限界があるだということに気づいた。正直なところ、この世界がいかように動いているのかが釈然とせず、それは日本についても同じだ。

自分自身、そして世界を深く知り、そこへ関与していくためにも、何か特定の切り口のようなものが必要なのかもしれない。それは私にとって、人間発達や教育という分野になるだろう。それらの領域を通じて、自己と世界を知り、自己を深める形で世界に関与していくこと。それを通じて日々を生きていくという思いを新たにした。

あまり人は直接私に述べてくれないが、自分は相当に不親切な人間なのだと思う。中途半端な優しさが逆に不親切につながっているように思うことがよくある。

自分も相当に不勉強であり、一生涯自分の無知と向き合っていくことの大切さについて先日書き留めたばかりだが、ほとんど勉強をしていない人に対して何も言わないというのはかなり不親切な態度のように思えてきた。この問題に対しても熟慮し、何かしらの行動指針を見出していこうと思う。

今日はこれから就寝にかけて、旺盛に読書を進めていこうと思う。一昨日から読み始めている“The Oxford Handbook of Philosophy of Education (2009)”の続きを読み進めていく。本書に収められている28本の論文のうち、今日から8つ目の論文を読んでいく。本日中にどこまで読み進めることができるかわからないが、明日中には本書の一読目が終わるだろう。本書を読み終えたら、ボストン旅行の際にケンブリッジエリアの古書店で購入した書籍群を読み進めていきたい。書籍を読む過程の中で出会った重要な箇所をメモし、そこで閃いた自分の考えをノートに書き留めていく。そうした積極的な読書を今日も進めていく。フローニンゲン：2018/10/10（水）12:16

© YOHEI KATO 2018

No.1343: Start from Dawn

It's 8:30AM, and the outside world became bright. Fortunately, it stopped drizzling, and I can see a clear sky. Groningen, 08:41, Wednesday, 10/24/2018

3246. エリオット・アイスナー＆マキシン・グリーン＆ジョン・デューイ

時刻は午後の四時半に近づきつつある。午後から続きを読み始めた“The Oxford Handbook of Philosophy of Education (2009)”を順調に読み進めることができている。

ここで休憩がてら作曲実践を行い、再び本書を読み進めていきたい。興味深いことに、本書を読み進めていると、先日ハーバード大学教育大学院(HGSE)を訪れた時に、スティーブ・サイデル教授から勧めてもらった幾人かの教育哲学者の名前が本書の中でたびたび出てきた。その中でも代表的な人物としては、エリオット・アイスナーを挙げることができる。アイスナーはスタンフォード大学教育大学院で長らく教鞭をとっていた研究者であり、特に芸術教育に造詣が深い。

少しばかり調べてみると、どうやらアイスナーの仕事に関してはあまり日本では知られていないようだ。サイデル教授からその他に紹介していただいた、教育哲学者のマキシン・グリーンの仕事に関しても日本において同様の状況にあることがわかる。

サイデル教授にせよ、キャサリン・エルギン教授にせよ、HGSEを訪問した際にお会いした二人が一様に述べていたのは、デューイの芸術教育論を参照してみることの重要性であった。今手元には、インディアナ大学出版から出版されている“The Essential Dewey”の一巻と二巻がある。それらの目次を改めて眺めてみると、どうやらデューイが芸術教育について論じた論文が収められていないようであり、別途デューイの芸術教育思想に関する書籍を購入する必要が出てきた。今の私の関心に合致するのは、“Art as Experience”であり、もう一つはデューイが執筆したものではないが、デューイの芸術教育論の解説書として“John Dewey and the Lessons of Art”は非常に参考になると思われる。近々再び書籍を一括して購入する際にはそれらの書籍を是非とも購入したいと思う。

午後から読み進めていた書籍は、タイトルの通り、教育哲学上の様々なトピックを扱っている。そのため、今の私の関心と距離が離れているものについては、自分の考えが刺激されにくいということを改

めて実感し、夕方から就寝にかけて本書を読み進めていく際には、やはり自分の関心事項に合致しているもの、もしくは関心に隣接したものを中心に読み進めていくようにする。そうすることによって、徐々に自分の中で教育思想の体系が構築され、関心の輪も少しずつ広がっていくだろう。兎にも角にも、自分の内側に知識や思想の体系を築き上げていく際には、自分の関心に引きつけて考えていくことが大切であるため、その点を忘れずにここからの読書を進めていきたいと思う。フローニンゲン：2018/10/10（水）16:38

No.1344: Flying Musical Notes in the Air

I have a feeling as if musical notes were flying in the air. I'll start to read a book about the philosophy of Michael Foucault. Groningen, 15:29, Wednesday, 10/24/2018

3247. 人間心理を取り巻く短絡的なナラティブについて

時刻は午後の七時半を迎え、辺りはもう暗闇に包まれている。秋の深まりをこのところよく感じる。季節が秋を迎えることによって、自分の内側で立ち現れる幾何学模様のイメージにも変化が見られるように思う。これは自分が毎日デッサンしているノートを見返してみるとすぐにわかる。

内側の世界と外側の世界には、それぞれ固有なパターンを生み出す力を持っているが、それら二つの力が相互作用しているような感覚を持つ。秋が進行することによって、自分の内側から生み出されるパターンを眺めてみるとそのようなことがわかる。

ボストンに滞在していた時にも気づいていたのだが、ここ最近はあまり夢を見ていない。厳密には、確かに夢を見る日もあるのだが、それが記憶に残っておらず、書き留めるほどではないという状態が続いている。季節の進行に合わせて、自分の無意識の世界でも何かが着実に進行しているようだ。無意識の世界について思いを巡らせていると、私たち誰しもが持つ心の闇（シャドー）について考えが及んだ。

米国の思想家ケン・ウィルバーが提唱したインテグラル・ライフ・プラクティスにおいて、自分のシャドーといかに向き合い、それを分離させることなく再統合していくことの大切さが説かれている。また、心理療法の世界において最も焦点が当てられているのはおそらくシャドーの治癒だろう。しかし私は

最近よく、シャドーは単に治癒すればいいというものではないということを考えている。人間心理は複雑な生態系としての特徴を持っていることを考えると、むしろシャドーを治癒することが生態系の危機につながってしまうこともあるのではないかと考えているぐらいだ。

確かに、治癒すべきシャドーが存在するのは確かである。歴史上、自己のシャドーに飲まれ、破壊的な行動に乗り出していった例は枚挙にいとまがない。一方で、社会的な、あるいは集合的なシャドーに立ち向かっていく際に個人の強力なシャドーをもとに活動を推進させている創造的な人物たちの姿を見ていると、彼らのシャドーは決して治癒されてはならないものに思えてくる。

一風変わった映画作品を数多く残しているアメリカの映画監督であるデヴィッド・リンチは、サイコセラピーを受けることを知人から勧められたが、それが自身の創造性の枯渇につながってしまうという洞察を持っていたがゆえに、友人の勧めを断ったという逸話を聞いたことがある。

ここからも、社会的に価値のある創造的なものを生み出すためには、個人の内側にあるシャドーが活力になっていることも十分に考えられるため、シャドーをすぐさま治癒の対象とみなすのは安直な態度であるように思える。これはもしかすると、とかく異質なものをすぐさま病理的なものとみなし、手当たり次第にそうしたものを治癒しようとする「精神的潔癖症」を患っている現代の風潮と関係しているかもしれない。

現在ウィルバーの書籍を監訳する仕事を引き受けたが、昨今の成人発達理論への関心の高まりに相まって、インテグラル理論に注目が集まるようになった際に、シャドー及び複雑な人間心理に関する短絡的なナラティブが蔓延しないかが非常に気になるところである。シャドーというのは決して手当たり次第に治癒すればいいというものではなく、それを治癒してしまったがゆえに、自分の内側にある本当に大切なものを喪失してしまうことにもつながりかねないという発想を持っておくことは大切なように思える。フローニンゲン：2018/10/10（水）19:57

3248. 不可避な哲学

思慮深さが足りないということは昔からよく思っていたことだが、ここ最近もますますそのようなことを自分に対して感じる。とりわけ、人間発達に関する実務経験を積むたびに、人間存在に関する哲学的な理解が欠けていることに気づく。哲学に価値を見出せず、それを無用のものとみなすのは、

おそらく実務経験を深く積んでいないからなのではないかと思う。実務経験を真摯に積んでいけば、必ず哲学的な問いとぶつかるはずである。おそらく哲学探究は、そうした問いとぶつかってから真に始まるものなのかもしれない。

先ほどの日記で書き留めていたように、心の闇を治癒することを盲目的に良いことだと信奉しているセラピストがいたら、そのセラピストはおそらく真摯に実務経験を積んでいないのではないかと疑ってしまう。

その個人や社会にとって害を及ぼすようなシャドーが何かを考える際に、「悪」という概念に対する問いは避けて通れないだろうし、究極的には「よき人間とは」という問いに必ず行き着くと思うのだ。仮にそうした問いに行き着かないのであれば、そのセラピストは浅薄な対人支援しか行っていないのだと思う。これはコーチやコンサルタント、そして教師なども含め、あらゆる対人支援を行う実践者に当てはまるだろう。いや、哲学的な問いに行き着くというのは、対人支援に携わるものだけではなく、全ての領域の実践者に当てはまることだと思う。

ここ最近は、芸術教育と教育哲学に関する探究に力を入れているが、そこでは必ず、「芸術の価値とは何か？」という問いにぶつかり、「よき教育とは何か？」という問いとぶつかる。まさに後者に関しては教育哲学が取り扱うテーマであり、前者に関してもそれは哲学的な問いだと言える。今は哲学の領域を拡大させることを控えているが、人間発達や教育に関して探究や実務を行えば行うほどに、倫理哲学や道徳哲学に関わる問いを考えざるをえないのではないかと思わされることがよくある。

今日読書を進める中で発見したのは、カリキュラム理論は、知ることや知識の本質を探究する認識論と密接に関係しているということだった。人間発達や教育に関係する哲学領域を挙げればきりがないが、これから長い年月をかけて、自分の哲学的な探究領域も少しずつ変化していくことをすでに予感している。まだ探究の準備の過程にいるのだが、そうした予感がすでにある。

今日はこれから就寝一時間前までの時間を使って、今読み進めている教育哲学に関する書籍を読み進めていく。今から読む章は、民主主義と資本主義の観点から教育を捉えていくもののようだ。政治学、そして経済学も教育や人間発達を考える上で必要不可欠な学問領域であることをここに

記しておく。ありとあらゆることを深めていくことは不可能だが、ありとあらゆることを自分なりに深めていくことなら可能だろう。フローニンゲン：2018/10/10（水）20:13

3249. 夢と昨日の意識状態

今朝は六時半を過ぎた頃に起床し、七時から一日の活動を開始した。昨夜は就寝前に、深い呼吸と共にいつもより念入りにヨガを行っていたためか、普段以上に睡眠の質が高かったように思う。そうしたこともあり、今朝の心身の状態は非常に良好だ。

この時間帯のフローニンゲンはまだ闇に包まれており、八時近くにならなければ明るくならなくなった。サマータイムが終了するまであと数週間ほどであり、ここからさらに日の出の時間は遅くなるだろう。

昨日の日記で書き留めていたように、ここ最近は記憶に残る夢を見ない日々が続いていた。今朝は起床した瞬間までは夢を見ていたことを覚えていたのだが、もうその記憶は曖昧になってしまっている。

ここ最近の夢は本当に逃げ足が速い。それはどこか言葉として形になることを嫌っているかのようだ。夜が明けない空を眺めながら今朝方の夢について思い出そうとしてみるが、どうもダメなようだ。思い出そうとしても、夢の記憶が暗い空に吸い込まれてしまうかのようである。

そういえば昨日の早朝にコーヒーを入れた時に、リアリティを構成する無数の膜のうちの一つから外に出たような感覚があった。これと似たような現象は昨夜にもあり、その現象について少し考えていた。

欧州での生活が進むにつれて、自分の内側で諸々の事柄に対して目醒めていくような現象がゆっくりと生じている。昨日の体験もその一環だったように思う。昨日の前者の体験は、おそらく目撃者の意識状態に近いものだと思う。後者に関してもそうした意識状態に類するものでありながらも、自己の根幹を探っていくような探索的な意識が働き、徐々に自己の深層に降りていくような感覚があった。

今日もそのような意識状態に参入する可能性があり、もしそうした状態を体験したら、再び考察を深めていこうと思う。このあたりは、確かに意識の段階とも関係してくる話だが、それよりもむしろ意識の状態に関する文献を参考にする方がいいだろう。そうした文献を参考にしながら、体験の分類をするだけではなく、体験の内容とその体験が持つ意味について吟味していきいたいと思う。

今日もまた読みに読み、書きに書き、作りに作る生活を送る。自分にはそれしかできない。

これからまずは、過去に作った曲を編集し、テレマンに範を求めて一曲ほど作る。ここ最近はバッハに範を求める際は、必ず四声のコラールに範を求めていたが、今日からバッハを参考にするのであれば、少し曲を変えてもいいかもしれないと思い始めている。

本日バッハを参考にするかはわからないが、明日以降にバッハを参考にする場合には、例えば変奏曲の続きを参考にしていきたいと思う。早朝の作曲実践を終えると、その流れで、ここ数日間読み進めていた教育哲学に関する論文集を読み進めていく。

おそらく本日中に初読が完了するであろうから、一読し終えたらその書籍から一旦離れ、今度は昨日届いた芸術教育の歴史に関する書籍を読み進めていくことにする。私の関心は、芸術教育が歴史を通じて抑圧されてきた要因やメカニズムを探ることであり、仮に歴史上において芸術教育の価値が認められる時期があった場合には、その要因やメカニズムを探っていくことにある。そこから現代における芸術教育の意義と役割を考察していくことが現在の関心の一つである。そうした関心をさらに育んでくれるのが、“A History of Art Education: Intellectual and Social Currents in Teaching the Visual Arts (1990)”という書籍だと思う。今日から本書を読み始めることを楽しみに思う。フローニンゲン:2018/10/11(木)07:33

3250. 研究手法の政治化

早朝に書斎の窓を開けると、冷たい空気が流れ込んできた。新鮮な空気を部屋に取り入れると、どこか気分も爽快なものになる。早朝に窓を開けていられるのも今のうちだと思うので、季節が冬を迎えるまでは、できるだけ早朝に新鮮な空気を部屋に取り入れたいと思う。

夕日のような朝日が辺りに降り注いでいるのを早朝に目撃した。それは本当に夕日と見間違えてしまうぐらいの朝日であり、早朝の時間に夕方のなんとも言えないような気分になった。今は午前十時を過ぎたこともあり、辺りはすっかり午前中の雰囲気を発している。

昨日一つ嬉しい出来事があった。とても些細なことかもしれないが、自宅の目の前の通りの工事が無事に終了した。ちょうど昨日の朝に、私は工事の最終作業の様子を観察していた。今はすっかりと道路が見違えるように新しくなっており、新たに敷かれたアスファルトの色が濃すぎるぐらいである。確かに予想以上に工事の完成まで時間がかかったが、作業員の方たちが毎朝早い時間帯から働いていたことを知っている私にとって、道路の完成は感謝の念を引き起こす。

同時に、ゆっくりと着実に物事を進めていくことの大切さを改めて教わったように思う。歩道に関しては少し前に工事が完成していたが、今日からは自転車道も開通となったようである。これからその道を通るたびに、夏から今日にかけて工事を行っていた作業員の方たちの姿を思い出すだろう。そして、日々の仕事を緩やかに絶えず進めていくことの大切さを毎回思うだろう。

早朝にテレマンの曲に範を求め、一曲作った。午後と夕方の作曲実践では、モーツァルトの変奏曲に範を求めようと思う。バッハの変奏曲に範を求めるのは明日にする。

午前中、教育哲学の書籍を読み進めていると、改めて、価値判断の介在しない研究は存在しないことがわかってきた。過去数年間、科学者として研究を進めていく中で、自分は真を司る領域を探究しており、自分の研究が美や善を司る領域とは切り離されたものであるという認識を持つ傾向があった。しかし、研究者が採用する研究手法は、そもそも「政治化」されていることに徐々に気付き始めていた。研究手法が研究集団内の政治や社会的期待の影響を受けることはおそらく逃れられないことなのだと思う。そしてそれは決して悪いことではないのだと思う。

問題なのは、自らの研究手法が政治化されていることに無自覚であることや、それによって研究結果が研究倫理に反してしまうことだろう。より厳密には、研究手法のみならず、研究者の発想の枠組みそのものが政治化から逃れることはできないため、研究者としていかにそれらを自覚しておくかが、研究結果の歪曲化を防ぐためには重要だろう。私が科学研究から離れていき、哲学探究に乗り出した背景には、科学研究における上記のような側面があったことが少なからず影響しているだろう。

© YOHEI KATO 2018

今度は哲学探究において同様の現象がどれほど顕著なのか、あるいはそれが水面下でどれほど起こっているのかに自覚的になるように努めようと思う。フローニンゲン：2018/10/11（木）10:29

3251. 芸術の美と自然の美及び午前中の読書より

もうすぐ昼食の時間となる。今日も午前中の探究活動と創造活動が多いにはかどった。今日は昨日と同様に、風が穏やかである。昼食を摂ったら、風を浴びることを兼ねてゴミを捨てに行こうと思う。

先ほど、先月にフローニンゲンの空に架かっていた虹について思い出していた。ここ最近は虹が現れるような天候になく、先ほどはなぜだか以前に見た虹について思い返していた。

人間が作り出す芸術作品には固有の美があるが、自然が作り出す美にも固有性と神秘性がそこにある。目の前の優れた芸術作品が自己を宙吊りにして、自分の魂を鷲掴みにする感覚と、自然が引き起こすその感覚とを比較してみたいと思う。

今書斎の目の前に広がっている景色の美しさは、どちらかというと、部屋の中に流れている音楽の美しさに似ており、両者は共に自分の魂を鷲掴みにするというよりも、自分の魂を大いにくつろがせ、その中にゆっくりと留まっておこうとするような作用をもたらす。

圧倒的な自然の美は、私の場合、夕日や虹などに感じることが多い。二つを厳密に比較すれば、私は夕日の方が虹よりも美しいのではないかと思ってしまうほどだ。ここ最近も、再びオーロラ観測旅行について少し考えていた。かかりつけの美容師のメルヴィンがいうように、一度オーロラを目の前で見ると、それは人生観を変える可能性があるとのことである。

とりわけ自然神秘主義的な傾向を持つ私にとっては、それは十分にありえることだ。この世界を見渡せば、オーロラを観測できる場所はいくつもあり、そのうちいくつかの国や地域について少し調べていた。

以前から、ノルウェーの海を船で移動しながらオーロラを観測するツアーに参加してみたいと思っていた。それに加え、最近は、もし来年アメリカに戻ることになれば、その年の冬はカナダでオーロ

ラを観測できる場所に宿泊するのもいいのではないかと考えるようになった。諸々の状況を見て、来年の一、二月にノルウェーに行くのか、再来年のその季節にカナダに行くのかを考えたいと思う。

午前中、計画通り、“The Oxford Handbook of Philosophy of Education (2009)”を読み終えることができた。本書から得ることは本当に多く、今後も何回も読み返すことになるだろう。本書に掲載されている論文の中で、プラグマティズムに関する記述を読んでいる時に、チャールズ・サンダース・パースの論文について言及があった。それは“How to Make Our Ideas Clear (1878)”という論文であり、直感的にそれを読みたいと思い、本棚からパース全集を引っ張り出し、該当論文を読んだ。

いくつかメモを取り、その論文を読み進めていると、以前読んだ時よりもパースの思想に入っていきやすい自分がいることに気づいた。インディアナ大学出版から出版されたパースのこの全集を購入したのは、今から数年前に日本に滞在していた時であり、その時に一読したのだが、その時はパースの思想が非常に難解なものに思えた。今でも論理学的な論文は難しく、それらを読む気もあまりないのだが、自分の関心を引くその他の論文については、パースの思想が親しみやすくなっていることに気づく。ここにも、少しばかり自らの歩みの進展を感じることができる。

無事に午前中に上記の書籍の初読を終えたため、午後からは“A History of Art Education: Intellectual and Social Currents in Teaching the Visual Arts (1990)”を読み始め、それに合わせて、先日ボストン美術館を訪れた際に購入したガイドブックを眺めたいと思う。フローニンゲン：2018/10/11（木）12:05

3252. 名も知らぬ誰かの仕事

時刻は夕方の四時に近づきつつある。フローニンゲンはこの時間帯が一番気温が高くなり、すっかり秋の寒さを感じられる今日この頃であるが、今はとても暖かく感じる。あまりにも西日が強いときには窓のカーテンを閉じているが、今日は太陽の光が幾分柔らかいのでカーテンを開けている。そのため、書斎には秋の穏やかな太陽の光が満ち溢れており、心身ともに暖かさを感じる。

つい先ほど、窓の外に広がる目の前の通りを眺めていた。昨日に完成した道路の様子を観察するためである。完成された道路の上を自転車で走る人たちの姿を見て、とても嬉しくなった。私が作っ

た道路では決してないのだが、作業員の方たちが長い時間をかけて作り上げた道路を人々が利用している姿には打たれるものがあった。

名も知らぬ誰かの仕事が、名も知らぬ誰かの人生に触れ、彼らの人生に貢献しているということ。作業員の方たちの献身的な働きぶりを知っている分、感動もひとしおであった。

一人の人間の人生が、仕事を通じて他の人の人生と繋がりうるということ。そして目には見えないところで他の人の人生に貢献をしうるということを目の当たりにするような経験であった。

今日はこれからモーツァルトに範を求めて一曲作り、そのあとは芸術教育の歴史的変遷に関する書籍を読み進めていく。現在私は、来年は再びアメリカの大学院に戻って探究をしようと思っているが、はてこの社会においていつから学校を卒業しなければ社会に出られなくなってしまったのだろうか？という問いが立った。ここでいう学校とは、大学などの高等教育機関だけではなく、小中学校を含んだ学校機関のことを指す。私たちはいつから学校を経由することが社会に出るために当たり前のことだと思うようになったのだろうか。それは思うというよりも、いつから社会的にそのような風潮や仕組みが出来上がったのかに興味を持った。

確かに、学校は多くのことを私たちに授けてくれる。一方で、学校では得られないものがあり、学校という枠組みの中で剥奪されてしまうものも存在しているという認識を私たちは持っておくべきではないだろうか。

今の私がまだ博士課程に行く道を選んでいないのは、そうした問題意識と関係していることがわかり始めた。学校機関では得られないものや、その枠組みの中で剥奪されてしまうものについては、これまでの日記で何度も書き留めているので、ここではあえてそれらについて具体的に説明することはしない。重要なことは、学校を経なければ社会に出られないと思わせてしまう社会の思想そのものをもう一度問うてみることにあるように思う。

仮に私が四つ目の修士課程に行き、そこから博士課程に進学すれば、学術機関は私に多くのことを授けてくれるだろう。だが、学術機関では探究できない領域の存在を見るにつけ、さらには学術機関の枠組みの中で剥奪されてしまう可能性を秘めたものの存在を認めるにつけ、学術機関の存

© YOHEI KATO 2018

在意義について、そしてそこに所属することの意義についてもう一度ここで立ち止まって考えてみたいと思う。フローニンゲン：2018/10/11（木）16:02

3253. 夢の中の人物との思わぬ遭遇

辺りが徐々に闇に包まれていく時間帯となった。夕食を摂り終え、これから就寝に向けて、本日の最後の取り組みに従事したい。実は夕食前に、驚くべき偶然の出来事に遭遇した。夕食前に私は、“A History of Art Education: Intellectual and Social Currents in Teaching the Visual Arts (1990)”を読み始め、大きな感銘を受けていた。

本書のページを開くたびに、新たな研究アイデアが浮かんできて、それを書籍の中に書き込んだり、あるいはノートに書き留めることをしていた。するとあるページの箇所で、一人の人物の名前に目が止まった。それは“John Ruskin”という人物の名前だ。その名前を心の中で読み上げた時、どこかで聞いたことのある名前だった。

そう思った瞬間に、私は今から四ヶ月前に見た夢の中で、「ラスキン」という謎の人物の人生について語るという行為を行っていたことに気づいたのである。まさかと思って過去の日記を調べていると、夢の中で本当に「ラスキン」という人物について語っていたのである。

その時の日記の一部を下記に抜粋したい。

****

雨の目覚まし時計が鳴る音が聞こえて来る直前、私は最後の夢を見ていた。それは無意識の世界で見た夢というよりも、ほぼほぼ覚醒意識の状態で知覚されたものであったかもしれない。私はそのような半覚醒の状態で、「ラスキン」という国籍不明の見知らぬ人間について物語を紡ぎ出していた。彼の生涯を辿るような形で、私は彼にまつわる物語を読み上げていた。

言葉だけが夢の中でこだまし、こだました言葉がイメージとなって喚起されるような夢だった。窓ガラスを打ち付ける雨の音が聞こえてきたのはその夢が終わりに差し掛かる頃だった。雨音によって目覚めてから、起床直前に見たこの夢について少しばかり考えていた。ラスキンとは一体誰だったのだろうか。6/9/2018（日記2673）

© YOHEI KATO 2018

****

おそらくこの夢に出てきたのは、夕方に読み進めていた時に出くわした、ジョン・ラスキン（1819-1900）のことだったのだろう。ラスキンは英国の美術評論家であり、思想家でもあった。

調べてみると、私が作風を好んでいるターナーの芸術作品を擁護するような評論を残していることがわかった。また後に、オックスフォード大学の芸術学科の教授を務め、芸術や経済社会に関して広く執筆活動を行っていた人物だったことを知る。

上記の書籍を読み進めていくと、ラスキンの芸術思想は、先日私が訪れたハーバード大学が提供する芸術コースの基礎になっていたことを知り、何か目には見えない様々なことが自分の人生の中で繋がっていることに驚きを隠せない。

ラスキンの思想についてさらに調べてみると、芸術、自然、社会のつながりを説く考え方に私は興味を示し、ラスキンの仕事についてより深く理解したいという思いが湧いてきた。まさかこのような形で、数ヶ月前の夢の中に出てきた謎の人物と出会うことになろうとは思ってもいなかった。

現在の私が芸術教育に関心を示しているのは、やはり何かの導きによるものなのではないかと思えてくる。ラスキンの芸術論については必ず参照する必要がある。

辺りは完全に闇に包まれ、遠くの空にかすかに三日月が見える。月の満ち欠けの量から判断するに、それは「繊月（せんげつ）」と呼ばれるものだ。繊月が静かに空に佇んでいるのが見える。

ラスキンとの偶然の出会いについて入浴中に考えていると、そういえば私は知らず知らずのうちに芸術の世界に導かれていたことに気づき、今自分が住んでいる家の通りは、オランダ人画家ジョージ・ヘンドリック・ブライトナー（1857-1923）にちなんで名付けられた「ブライトナー通り」という名前であり、その向こう側の通りの名前は、「ヴァン・ゴッホ通り」だ。

二人はオランダを代表する画家であり、同時代人ということもあり、二人は親交があったようだ。芸術家にちなんだ通りの上で自分が毎日生活を送っているということも、きっと何かの縁と意味があるに違いないと思わざるをえない。フローニンゲン：2018/10/11（木）19:51

© YOHEI KATO 2018

3254. 意識が変容する夢

今朝は七時前に起床し、そこから心身を一日の活動に向けて調整していくためにヨガを行った。その後、七時半から一日の活動を開始させた。今ようやく辺りが薄明るくなり始めている。

フローニンゲンは秋の中休みなのか、ここ数日間は暖かさを感じる。明日には最高気温が26度近くに達するようであり、極めて暖かい日となる。ただし、明後日以降からは最高気温が一気に低くなり、15度前後になるようだ。今日と明日の暖かさを存分に感じようと思う。

ここ最近記憶に残る夢を見ないと述べていたが、今朝方ようやく記憶に残る夢を見た。記憶に残る夢を見たのはいったい何日ぶりだろうか。

夢の中で私は、ある建物の中の和室にいた。その建物は決して旅館ではなく、オフィスビルのような建物なのだが、なぜか和室が存在していた。その和室には二方にふすまがあり、もう二方のうち一つは窓であり、最後の一つは壁であった。その和室には、私以外にもう一人見知らぬ中年男性がいた。

その人と世間話をしていると、その人が突然、「ふすまを閉めて部屋全体を白くしよう」と提案を持ちかけてきた。私はその提案の意味はよくわからなかったのだが、部屋全体を白くするのも悪くないと思い、部屋を白くする作業に取り掛かった。

すると男性が再び、「人がやって来るから早く仕上げて、彼らをこの部屋に入れないようにしよう」と述べた。ちょうど私の友人もこの部屋にやって来るはずだったのだが、その男性の提案を受けて、友人を一旦部屋の外に締め出すいたずらをしようと私は考えた。

男性の提案通りに部屋を白くすると言っても、白いペンキで部屋を塗るということを行ったわけではない。部屋のふすまを全て閉めると、自動的に部屋全体の色が白くなり始め、窓の扉を閉めればそれで十分だった。厳密には、窓の扉についている奇妙なほど数の多い電球の光を一つ一つ消していけばそれでよかった。小さな電球は綺麗な数列をなしていたらか、おそらく48個か60個ぐらい存在していたのではないかと思う。

© YOHEI KATO 2018

その男性と協力して私たちは全ての電球の光を消した。光を消したところで、男性は不気味な笑みを述べ、大きなパイプを私に差し出した。

「これを使って別の層の意識に降りていこう」と男性は述べた。タバコですら吸ったことのない私は、そのパイプの使い方がわからず、それは無理だと述べた。すると男性は、手本を示すかのようにパイプを口にくわえた。その瞬間に、パイプが生き物のように前後に動き出し、煙をその男性の体の中に勢いよく何度も流し込んだ。

その男性は幾分気持ちようさそうな表情を浮かべた後、煙を口から吐き出し、そのパイプを無言で私に差し出した。今目の前で見たように吸えばいいのかと思い、私もパイプをくわえてみた。

すると突然、パイプがまたしても生き物のように前後に動き出し、自分の身体の中に煙を流し込み始めた。男性がパイプを吸うところを見ていると、煙を全て身体に入れるようであったが、私は途中で耐えきれなくなり、パイプを口から離した。しかし、それでも十分なほどに煙が身体の中に流れていったようである。パイプを口から離してすぐに、気分がとても高揚してくるような感覚があった。

私はその場に横になり、横になるとすぐに、自分の意識が深い層に降りていくことを感じ始めた。意識が別の層に降りたことがわかった時、夢の別の場面が始まった。

今朝方はそのような夢を見ていた。ここしばらく夢を見ないと思っていたら、今朝方は非常に奇妙な夢を見た。

夢の中の意識からさらに深い意識の階層に降りていく夢だった。夢の中の意識状態ですら、通常の意識状態とは異なるにもかかわらず、そこからまた意識状態を変容させて、さらに深い意識状態に参入することを示唆する夢だった。こうした夢は時々見るのだが、徐々に見えてきたのは、夢の意識よりもさらに深い層に降りていくと、そこは無数のシンボルやイメージで溢れ返る世界が知覚されるということだ。

意識状態に関する研究を眺めてみると、大雑把に五つほどの分類がなされていることがあるが、私が今朝方参入したのは、おそらくサトルとコーザルのちょうど中間にある意識状態なのではないかと思う。その中間地帯には、色鮮やかなシンボルやイメージが溢れ返っており、今朝方の夢の中では

© YOHEI KATO 2018

そうしたシンボルやイメージが無数に飛び交う世界に参入していた。夢についての観察は本当に色々なことを開示してくれるのだと改めて思う。今朝方の夢の内容については、いろいろと意味づけをすることができるので、それは自分の頭の中で行うことに留めようと思う。フローニンゲン：2018/10/12（金）07:54

No.1345: A Dream of Dark Night

I'll finish my work and go to bed in a short time. I'm wondering what kind of dream I'll have tonight. Groningen, 20:58, Wednesday, 10/24/2018

3255. ギリシャ正教の教会に関する夢

時刻は午前八時に近づいてきている。この時間帯になると、辺りはもう明るくなっている。

遠くの空に、赤紫色の朝焼けが広がっており、とても美しい。今日も穏やかな一日になりそうだと予感する。

ちょうど昨日は、繊月（せんげつ）と呼ばれる月が夜空に姿を現していた。それをぼんやりと眺めていると、月の精霊のささやきが聞こえてくるかのようだった。今日はどのような月が見えるだろうか。

先ほど、今朝方の夢について振り返っていると、あの夢にはさらに続きがあることを思い出し、その記憶がまだ残っていることに気づいた。次の夢の場面では、私は一人のサッカー監督と話をすることになっていた。その監督は、どこかの女子サッカーチームの監督を務めており、その指導にはとても定評のある方だ。ちょうど私は、練習を見学させてもらえることになり、練習が行なわれているグラウンドに足を運んだ。

到着した時には、練習がほぼ終わりに近づいており、私はほんの数分だけ練習を見学することになった。練習が終わると、私は監督に挨拶に行った。実は今回が初対面であるため、簡単に自己紹介をした。その時に私は、自分の職業を偽るつもりはなかったが、テレビ局で勤めていると述べた方がいいのかもしれないということが一瞬脳裏によぎり、「XXというテレビ局の報道を担当している」というところで一旦言葉が止まり、再度「XXというテレビ局の報道を担当している方たちのコンサルティングを行っている者です」と自己紹介をした。

© YOHEI KATO 2018

とてもまどろっこしい自己紹介になってしまったため、監督も笑みを交えながらも一瞬戸惑った表情を見せていたので、キー局の友人からの紹介だと伝えた。するとその監督は、そうかそうかという表情を浮かべ、ここで立ち話をしていてもあれなので自分のオフィスでゆっくり話をしようと持ちかけてくれた。

練習が行われていたグラウンドからオフィスまでの距離がどれくらいあるのかわからなかったかが、私はとりあえず監督についていき、その途中でも色々と話をした。実はグラウンドと目と鼻の先に、ギリシャ正教の巨大な教会があり、その教会の上層部に監督のオフィスはあるとのことだった。

この教会は本当に巨大であり、それはもはや教会というよりも、テーマパークのような大きさであった。教会の入り口から中に入ると、ビルの中にある会議室のような場所があったり、ジャングルがあったりと、自分の目を疑うような場所が多々あった。監督はそうした光景には当然慣れているようであり、颯爽と歩みを進めていく。その最中に、オフィス内の様々な人とすれ違い、そのたびに彼らはその監督に挨拶をしていた。

この監督はオフィス内でも有名人のようだ。その監督は男性なのだが、実は女性以上に小柄であり、線が極めて細い。紆余曲折した通路を小走りのようなペースで歩き、次々と見慣れぬ景色の中を歩いていくと、その先に階段があった。

階段の前に差し掛かった時に、一人の若い女性社員とすれ違い、すれ違いざまにその女性が、「相変わらず細いですね」と監督に述べていたことを覚えている。その階段を上った先には、巨大なケーブルカーがあり、それに乗って監督のオフィスがある階に向かっていくことになっていた。そのケーブルカーからの景色は絶景であり、先ほどまでいた教会全体の作りと共に、周りの景色を眺めることができた。そこで監督が一言つぶやいた。

監督:「この建物はもともとはギリシャ正教のものだったんだけど、歴史のある時点でローマ教会のものになってしまったんだ」

私:「それを聞いて、建物の中に入った時にどうもギリシャ正教の感じだけではない何かがあると思っていたことの意味が納得できました」

© YOHEI KATO 2018

私がそのように述べると、ケーブルカーは速度を一気に上げ、ジェットコースターのような乗り物に乗っているかのような感覚があった。ケーブルカーが目的の階に到着したところで夢から覚めた。フローニンゲン：2018/10/12（金）08:15

No.1346: Inner Flames of Early Morning

I can feel inner flames in the early morning. I'll engage in my daily activities as usual. Groningen, 09:09, Thursday, 10/25/2018

3256. 非民主主義的なアセスメント

優しい朝日がフローニンゲンの町に降り注ぎ始め、これから一日の活動を本格的に始めようと思う。ここ数日間はシベリウスのピアノ曲を聴くことが多かったが、今日からはテレマンのピアノ曲を聴くことにした。

テレマンは私がよく作曲の参考にする作曲家であり、今日から聴き始めたピアノ曲集はテレマンの曲の持つ特徴をよく伝えてくれているように思う。今日はこれからバッハに範を求めて作曲していく。

昨日モーツァルトに範を求めて作曲をしている最中に、作曲は音楽空間上のパズル的側面を持つと改めて感じた。もちろん、パズルを超えた側面を持っていることが私を作曲にのめり込ませているのだが、そうしたパズル的な側面も面白さの大切な要因であることは間違いない。

以前の日記で紹介したように、部分と全体の話になるが、一つの全体を想起して曲を作っていくことと、部分を積み重ねながら全体を作っていくことの双方の道があるように思う。特に後者の場合は、パズル的な性格をより強く持つと言えるのではないかと思う。今日これから作っていく曲はどちらの方向性を持つものなのかはわからず、それもまた一つの楽しみである。

作曲実践を終えたら、昨日から読み始めている“A History of Art Education: Intellectual and Social Currents in Teaching the Visual Arts (1990)”の続きを読み進めていこうと思う。この書籍から得られるものは非常に多く、芸術教育の価値が歴史的にどのように変遷してきたのかを探究するヒントが詰まっている。

昨日本書を読みながら、おそらく私が採用するであろうアプローチは、発達理論を用いながら、歴史の様々な地点において存在していた世界観がいかような段階のものであり、それがどのような政治経済的な仕組みによって芸術教育の変遷を産んで行ったのかを探究していこうと思う。昨日と同様に、積極的にメモを取りながら読み進めていくことになるだろう。

昨夜改めて、IQによる知性の測定の問題について考えていた。私たちの発達は、必ず時間に組み込まれた形で実現されていくが、IQにはそもそも時間の概念が組み込まれていないのではないかということに気づいた。

IQを一度測定したらそこで終わりであり、IQというものの中には、そもそもそれは発達することを所与にしていないのではないかと思われた。ここからさらに考えていたのは、IQというのはやはり人を分類することに活用するためのツールに陥る危険性が高く、そこに発達の概念を認めないのであれば、なおさらそうした分類は危険なように思えた。端的には、それは決して公平なアセスメントではないのだと思う。IQはスコアとして算出されるが、それは結局のところ、IQが測定しようとする知性の特質──これが極めて曖昧なため、IQの妥当性は非常に低いのだが──をどれだけ持っているかを開示するに留まり、ほぼほぼ性格類型テスト程度のものでしかないのではないかと思う。

一番の問題は、そこに時間の概念が組み込まれておらず、発達という概念がないがしろにされていることであり、ひとたびIQの値が算出された途端に、それがIQという単一の指標に基づいた人間の序列化につながってしまうことだろう。そしてもう一つ大きな問題としては、それが対話の生まれない一方向的なアセスメントだということである。そもそも、何かしらのアセスメントを受けるというのは、そのアセスメントが対象とする能力領域の現在地を確認し、これからそれを育んでいこうという意識が大切なはずである。

IQのアセスメントのみならず、多くのアセスメントではこの意識が極めて希薄であり、アセスメントを受けて、人をボックス化しておしまいにしてしまうものが数多いことは気掛かりである。IQを含め、多くのアセスメントでは、アセスメントを提供する側とアセスメントを受ける側との対話が皆無であり、アセスメントを受けた後に一体何をすればいいのかに戸惑ってしまった経験がある方も多いのではないかと思う。

© YOHEI KATO 2018

先日、ある友人の方と話をしていた時、「昔、外資系の人事コンサルティング会社が持ってきたアセスメントを受け、その結果を見て“So what?”になったのを覚えています」とその方が述べていたことを思い出す。

アセスメント結果がアセスメントを受ける者にとって“So what?(だから何？)”になることは問題であり、それよりも問題なのは、「だから何なのか」をアセスメント提供者に問う対話の機会がないことなのではないかと思う。つまり、現在世の中に多く広まっているアセスメントは、対話型ではなく、一方向的に人を何かしらの評価軸に当てはめて終わりにしてしまうような、非民主主義的な道具にすぎないのだということである。

私たちのさらなる成長につながる有益なアセスメントは少なくとも、アセスメントを受けた者が現在どのような段階にいて、これからどのようなアプローチで次の段階に向かっていくのかを対話できるような公平性(民主主義性)を持っているものだと思う。

私自身もこれまで随分と理不尽なアセスメントを受けてきたように思う。いや厳密には、真に自分の成長を促してくれるようなアセスメントは皆無であったようにすら思う。アセスメントに関する社会的な発想の枠組みが現状のままであることをひどく危惧するのは私だけではないだろう。フローニンゲン:2018/10/12(金)08:52

No.1347: Shimmer of a Rainy Afternoon

It started to drizzle just a couple of minutes ago. A shimmering rhythm arose from the inside of myself. Groningen, 16:02, Thursday, 10/25/2018

3257. テレマンとバッハの曲:芸術教育を取り巻く価値観の変遷過程

たった今昼食を摂り終え、これから午後の活動に入る。今日は早朝から、心身が活力に満ち溢れており、探究活動と創造活動を前に進めていく上で申し分のない状態が続いている。

早朝より聴いているテレマンのピアノ曲は本当に美しく、心身に落ち着きをもたらしてくれる。季節は枯れ葉が舞う時期に入ってきており、それは同時に、自分の内側の何かが深まっていくことも表している。こうした秋の雰囲気に調和するような音楽世界をテレマンの曲は持っている。

午前中にはバッハの変奏曲を参考にして一曲作った。バッハの曲を参考にするのは、やはり非常に勉強になると改めて思った。おそらくバッハが一つ一つの曲を念入りに構築しているためか、曲の構造を一つ一つ追っていくことが学びになっている。

確かに、そうした構造を一つ一つ丹念に追っていくことは骨の折れることであり、時間がかかるのだが、それに見合うだけの学びがそこにある。早朝にはいつも、構造的に簡易な曲を参考にして曲を作っているのだが、今日はバッハの構造的にしっかりとした曲を参考にしたこともあり、作曲実践に随分と時間を充てていたように思う。

今日も午後と夜に二度ほど作曲実践を行う予定であり、その際にはモーツァルトの変奏曲を参考にしようと思う。今参照しているモーツァルトの楽譜の中には、まだまだ参考にしていない曲がたくさんあるため、一日に二曲ずつモーツァルトに範を求めるのは悪くないペースだと思う。

午前中の作曲実践が終わった後に、“A History of Art Education: Intellectual and Social Currents in Teaching the Visual Arts (1990)”の続きを何章か読んでいった。今回は初読であるため、各章の要約を丹念に読み、その後本文の中で関心を引くテーマについて読解を進めるようにしている。

本書は確かに、日本やアジアの芸術教育の歴史的変遷について一切触れておらず、それは本書の主題でもないのだが、欧米の芸術教育の歴史を辿っていくと色々と見えてくることや考えさせられることがある。芸術教育は単に抑圧され続けてきたわけでもなければ、価値が一定のまま保たれてきたわけでもなく、社会の価値観に応じてその価値が随分とダイナミックに変動していることがわかる。

ここから私が関心を持ったのは、それぞれの時代において、どのような発達段階の価値観が芸術教育の世界の中で支配的であり、それが抑圧の方向に働いていたのか、それとも価値を高める方向に働いていたのかをまず調査してみたい。そして、その後どのような価値観が台頭することによって、芸術教育の価値がいかように変遷して行ったのかを調べてみたいと思う。午前中と同様に、午後からもメモをノートに取りながら、思いついた考えをノートに書き留めていくような、能動的な読書を続けていく。

© YOHEI KATO 2018

これから少しばかり過去の日記を編集し、散歩がてら近所のスーパーに立ち寄りたい。道中の街路樹が美しく紅葉している姿を見るのは、自分の気持ちをさらに落ち着かせてくれる。フローニンゲン：2018/10/12（金）12:49

3258. 診断型アセスメントと成長志向型アセスメント

ちょうど先日にふと、このリアリティには対極性が遍く存在しており、それが共進化の道を歩んだり、共退化の道を歩んだりしている様子が知覚された。二つの極が足並みを揃えて進化の方向に進んでいくことや、同時に退廃の方向に向かっていく現象は、このリアリティの中で多く見出せるだろう。

先ほど考えていた、芸術教育を取り巻く世界観の変遷過程においても、何らかの二つの鍵となる極が存在していて、それらが共進化の方向に向かう形で芸術教育の価値を高めることもあれば、逆にそれらが共退化の方向に向かう形で芸術教育の価値を貶めることもあるのではないか、という新たな考えが浮かんだ。この考えをより具体的な歴史事象に当てはめるためには、芸術教育を取り巻く二つの極を見つけていくことが重要になるだろう。芸術教育の世界には、どのような対極性があるのだろうか。

今はこの問いへの回答は一切わからないが、もうこの問いが立ったということは、いずれそれに対する自分なりの回答が得られるだろう。この問いも自己の内側に寝かせておき、問いの熟成と自発的な発展を見守りたい。

早朝に執筆した日記の中で、アセスメントについて言及していたように思う。端的には、現在のアセスメントの多くは非民主主義的であり、アセスメントは対話を促すものである必要がある、ということを述べていた。昼食を摂りながら、この話題について再び考えていた。

早朝の日記では、アセスメントを一括りにして考えており、日記を執筆している時の自分の思考の枠組みは発達理論に依存するものであったため、アセスメントの種類に関しても自ずと知性の発達を測定するものと想定していた。しかし現実には、そうしたアセスメント以外にも、純粋に何らかの診断に活用するものも存在することに改めて気づいた。今はあえて身体のアセスメントや文化や制度のアセスメントにまで話を拡張させるのではなく、私たちの内面領域の話に絞ろうと思う。

© YOHEI KATO 2018

そうした場合に、精神病理や性格類型などを特定していく診断型のアセスメントと、測定した知性や能力をさらに高めていこうとする成長志向型のアセスメントが少なくとも存在することがわかる。分類基準についてより厳密なものにすれば、さらに細かく分けられるだろうし、そもそも別の分け方もできるかもしれないが、とりあえず診断型のアセスメントと成長志向型のアセスメントの二つを想定する。

早朝の話は、それら二つのタイプのアセスメントにおいても当てはまるだろうが、とりわけ問題が大きいのはやはり後者のタイプのアセスメントだと思う。前者に関しても、診断で終わりにするのではなく、それこそ精神病理を特定することを目的にしていれば、それに対する適切な処方を提供することが必要だろう。

精神療法家の方たちの話を聞いていると、比較的それは行われており、病理が見つかったのにもかかわらず、放置するという非人道的なことはさほど横行していないように思われる。一方で、成長志向型のアセスメントに関しては、そうした非人道的な放置が行われているような状態だと言えるかもしれない。いやそもそも、本来さらなる成長を支援するためのアセスメントが、人を単に枠組みに当てはめるだけの道具に成り果てている点で、よりタチが悪いと言えるかもしれない。結局のところ、既存の成長志向型のアセスメントは、人を固定的な枠組みに当てはめるためだけに使われているという点において、診断型アセスメントの劣化版のようなものになってしまっており、本来目的とする事柄を一切遂行していないように思える。

おそらくそこには、アセスメントの開発者、提供者、利用者の発達リテラシーが極度に低く、成長志向型アセスメントの本来の目的と役割が見えなくなってしまっているという問題があるのではないかと思う。それが成長志向型アセスメントの誤った使い方を招き、対話の一切ない、非民主主義的な道具を用いて人の成長可能性を蝕むことにつながっているのではないだろうか。そのようなことを昼食を摂りながら考えていた。フローニンゲン：2018/10/12（金）13:11

3259. 夜空の月を眺めながら

つい今しがた夕食を摂り終えた。夕食を摂っている最中に、昨日に続いて夜空に輝いている繊月（せんげつ）をぼんやりと眺めていた。

時刻が午後の七時半を迎えると、辺りはほぼ闇に包まれるようになった。これから就寝に向けて、作曲実践を行い、夕方から読み始めた、ハワード・ガードナーの“The Disciplined Mind (1999)”の続きを読んでいこうと思う。

本日は無事に、“A History of Art Education: Intellectual and Social Currents in Teaching the Visual Arts (1990)”の初読を終えた。明日から再読を始めていく。その時には、初読の際に気になりながらも読み飛ばしていた箇所を読んでいく。

本書を読むことによって、芸術教育に関する今後の探究の焦点が少しずつ見えてきた。芸術教育を取り巻く社会的な思想と芸術教育システムの分析をする際に、まずは対象国と時代を絞り、その国のその時代の芸術教育を取り巻く社会経済的な価値観と芸術教育システムの調査から始めた方が良さそうだということが見えてきた。

いきなり大きな風呂敷を広げるのではなく、小さなところから探究を始めていき、可能であればそれを論文の形にまとめていくのも良いと考えている。そのためには、ここからさらに焦点を具体的にしていき、その焦点に関する文献調査を進めていきたいと思う。

先日友人と話をしている時に、自己肥大化した人たちに関する話題となった。端的には、世界を自分の手で変えられると思っている人たちの安直な発想について話題となった。こうした発想が生まれてくる根元には、独我論的な思考の枠組みがその人の中に根付いてしまっているのではないかと思う。独我論とは、他者や外的世界は自分の意識内容に過ぎないという偏った発想なのだが、上記のような考え方を持っている人はそうした発想に気づかないうちに陥ってしまっているように思う。「自分が認識する世界の一部を変えていくことができる」というのならまだしも、自分が世界を変えることができるというのはあまりにも独我論的な自己肥大化した発想ではないだろうか。

今日はこれからモーツァルトに範を求めて作曲をする。明日の早朝には、今朝と同様に、バッハの変奏曲に範を求める。これからの作曲実践においては、いつも以上に最初の全体把握にかける時間を十分に取ろうと思う。最初にモーツァルトの曲の構造を分析する際に、いつもよりそれを丹念に行っていく。最近はこの分析作業に時間をかけることなく、すぐさま曲を作り始めるような習慣になっ

© YOHEI KATO 2018

ていた。ここでもう一度そうした習慣を捉え直し、最初の段階の分析で新たな発見や気づきがないかを確認していく。

分析に関する観点を増やすためにも、近々再び作曲の理論書を読むことを行ってもいいかもしれない。把握するべきことと獲得するべきことの核は、構造そのものを生み出す力そのものである。その力の正体を掴むことができたら、曲を自由自在に生成していく境地に一歩近づけるように思う。曲が湧き出ている泉を見るのではなく、泉そのものを生み出している力に着目していく。フローニンゲン:2018/10/12(金)19:47

3260. 海の上を飛ぶ夢

今朝は七時に起床し、七時半から一日の活動を始めた。今日も比較的長い睡眠を取ったため、心身の状態は極めて良好だ。

本日は土曜日ということもあり、昨日にも増して辺りがとても穏やかだ。ちょうど今朝日が昇り始めており、赤レンガの家々の輪郭が見えてきて、紅葉した街路樹に朝日が少しずつ当たり始めている。今この瞬間のフローニンゲンの町の様子はとても幻想的だ。

起床してみてすぐに気づいたが、今朝は気温が暖かく感じられる。天気予報の通り、今日と明日は秋のフローニンゲンにしてはとても暖かい日となる。今日の最高気温に関しては、26度に到達するようであり、明日のそれは23度だ。明後日からは18度になるが、この土日は暖かい日を過ごせるだろう。

先日、人間の心に潜むシャドーについて言及していたように思う。シャドーは、悪事を働くこともあるが、個人の創造性の源や活動の原動力になり得るという肯定的な側面も持っているという話だった。シャドーを単に諸悪の根源とみなすこともまた諸悪の根源なのだということを書いていたように思う。今朝方は、そうしたシャドーが夢の世界を形作り、印象深い夢を見ていた。

夢の中で私は、干潟のような場所を歩いていた。何の目的があってそこを歩いていたのか全くわからない。周りには誰も人がおらず、私は一人でその干潟の上を歩いていた。しばらく干潟を歩いて

いると、自分が随分と遠くのところまでやってきた感覚があったので、そこで初めて後ろを振り返った。

すると、潮が満ちてきており、自分が通ってきた場所は全て海に変化していた。再び前を振り返ると、目の前も海に変わっていた。かろうじて、自分の足元だけがまだ干潟の状態であった。潮の満ち引きは想像以上に早く、このままだと足場が無くなってしまう恐怖を感じた。だが、もう手遅れなほど潮が満ちてきている。

そこで私は、空を飛ぶことによって来た道を引き返そうと思った。空に浮かび上がり、空を飛び始めると、自分が歩いてきた場所はもう海面の随分下にあることがわかった。

遠くの方にヤシの木のような植物がかろうじて見えた。おそらくそこが自分がやってきた島なのだと思い、そちらの方に向かって飛んで行った。その小さな島に近づくと、左手にマンションが見えた。一棟だけぽつりと立っているマンションの下の階は海面の下にあり、このマンションにどのような人が住んでいるのかとても気になった。

そこからさらに飛行を続けていると、海面の下からサメが出てきはしないかという恐れが生まれた。私が飛行している高さは低く、海面から一メートルほどの高さでしかなく、仮に水面下からサメが顔を出したら、自分は食べられてしまうかもしれないという恐怖があった。

そこから何とかもう少しだけ高度を上げ、飛行を続けると、ようやく右手に見覚えのあるカフェとレストランの姿が見えた。どちらの店にも多くの客が入っており、とても賑わっている。その姿を見て、無事に元いた場所に帰ってこられたことに安堵感を覚えた。そこで夢の場面が変わった。

その後の夢の場面では、以前勤めていた会社の上司が出てきたことを覚えているが、それほど記憶に残る夢ではなかった。前半に見ていた夢について、とりわけそこに現れていたいくつかのシンボルの持つ意味に対して静かに振り返ることから今日が始まった。フローニンゲン：2018/10/13（土）07:53